

一茶抄

養正學錄之内
春成手録

特別
14
1919
734



特
14
1919
113
734



●茶抄

昭和十五年十月



つふの何も汗にこころうきんもの

うき世並とそむくまゝに

はかくし死後くくとしむしの

あはれ夕に来つゝゆえん

ちきしりの涼もあまきまの

七一都りまけうにんく時き
おぶ夜ハ短くとこ目出なけん
あま涼しきしとつなひとら
ふるさや山七なうく花の命のと
一のうらまをたはらふ
人の心とくふさ山に花の

法はけ経の都をからし
手係て死を捨く産の子
名月や鏡般はと一なるい
つるかぬの中かゝ露の出るけ
望ばくこや銭の巾さきりす
主秋もふくぬ産ハ併哉

けを正奇飯に借て寝るなり

けはけの聖はあすをなく柴の

海さけあくのたのもしき哉

初七のやぶも佛にくく〜

らの海さけあくのたのもしき哉

たはあすの聖はあすをなく柴の

ねはあすの聖はあすをなく柴の

後の出ぬは中くさくさ

今の母やい儀はあすをなく柴の

道江への聖はあすをなく柴の

船中さうく登れあすは

大教の聖はあすをなく柴の

身をかげりて

影もあらずあきつてもあつと露の世の

露をこぼし思はざらん

にくきく 浅塚の筆の

よらんうらむ生出のうら

掃溪を山と見えし秋の月

目出度さはあつこのあつこみさの

西栗の志ら露稗のあつ白

ふしきせ生んだ家でもあつ月

まきくしんがら我も旅人を

くやしも 熟柿中尚のほこつきぬ

我家は煤井名の秋ねふ

馬の尻に次元はさんし

名月の御説きの通り居るま
有のや浅間の霧が暁を這ふ
我尾の太刀も切んころふ
袖も二重三重のあつ山路ふ
鳥の一人きげんや秋のさき
はるの世問並るの解けぬや

巻や田舎廻ふくはし
露の世は湯心もつて
流るや力一杯きりくま
そのあつまが花さく老木は
古里やよもさほつて花
朝白も銚ねけ瀬く浮世は

世の中よびかい露から先おつ
雉鳴くや国ハ州を一吞り
水の吹けぬ家をとりまゝ木権也
一升びいくゑ物と露の玉
稲妻の打力なきその家也
露の世を押し合へし合はぬの世

さあまのとお口のけしざくら也
日本はぶくちの錢もさくら也
かしましや江戸見た丁のゆり枝
けぬ村や馬鹽かまも鴨のま
まらまやせぬかぶらに五十字
庵の雉のふか掃めとくぬけり

泣く鳥日本の我と見えぬ
二月村二兵衛新田梅の花
淋しきや夜多か下の先祖を
秋の縁安山子の袖にまきけり
妹捨ききは老きもあつか
有念の上はすまじきやよの月

名月やとせふくまをさつしき
心月のたつと急き給ふら
あまこころに書さふこころ
犬もかどけとくしけり雪の足
はやらぬ末世をさくられたけ
雲を吐く口つきしき

目出・反々んこころの故も空しく
花の跡も七若きは美しき
るいやつと活れ所か秋の香
あはれ骨もむいとすんと夜寒也
共の安寧や汝か聞けはいつく仲
たもつたる音もさる春のさ

目かまいごとむたる世が
目か告いさるるのさるる世が
キかぬ舞の江戸の門も柳のさ
老の身ハ口の永いも涙も
あだな身に勿体さるる日永が
是程のけろふ梅も春のさ

西ののやうにまわつて
江戸をみた大音あつた時
まんがしかたの敷飯の
世う位は飯のそく敷
我つやあ鷄も鳴かす
とよき女の髪はつるあ

敷飯の味をよこす
名月につらりとま
つまる日を虫もぎ
天下太平とまら
書飯とよきけと

灯をついて見てはやつぱりいとう哉
涼風も餅の枝のちまき丸
油のほのほはけや筆の煙のけり
筆も思ふやに思ふりけり
順々に大筆の書りけり
かんがうと一雨あひて餅のけり
出ら筆を筆とおろすぞ出よ筆

我門や此界隈の雪捨場
おなドクにけみぬ先にとけよ雪
尾の餅雪より先にけりけり
世に住ばあつらとあまや門の雪
七首の種やえんもいはぬ教の家
七月の大べら坊に白るふ

美くは親からさへくも
人の世の後にさへくも
此やうに枯もさへくも
雷佛丈と子供があぬりや
世の事ハかゝりて

白雲の佛ハつらき
心を教むるばあやむる
鳴けはあぶ住たもまを
あまうほつたさへくも
直ら世をへん因果を

雪ゆけく都のたはけ待おん
夕まを三日待せり三粒哉
暑きりやこやくと算盤枕こふ
おそ起や飯屋から呼ぶ豆腐煮
あちこちの聲にまぶつく響丸

蚤の女と吹と替つてささる子丸
蚤の女とかきくささるん流乳丸
涼しさを朝草のみの腕の湯
を灸糸を年か差かよと巻まいと
涼しさを蒲池の体のちくち丸

秋の蝶ころびなほそハ又鳴女
まぶ條を憐み冷くまのいし
うかよ来て我をかしの替り哉
どじもくも若いあま山子にまけり
まかー三ッ四ッ五ッ六ッかーや

大石は深のそ通つと炬燵ふ
犬の子が進よを行也雪礫
狭くもいざおひの尾の正
我尾は故柱ばかり曲らぬぞ
シきは是切とばくろく哉

来ハ・リて一かおの性・存

夕・まや三・文たもそんそんぞ

けつぎや命の尖はきいたまふぞ

身にまゝぬ夕まばらりく乱

おまよけの足らぬ所くか・しど

八文か・あ見せけり・速めりか

月さしと一入格のまき・さか

あつぬけをとも垣かち柳りふ

睦しや生ん坊らぬあふの襟

清しきや大福帖を執りて

白土の雪まじりくと田舎さ
蓮の葉に此世の心は曲りけり
さくらくと唄いんー老梅さ
大根引大根ひるを教くけり
思ふさま寐て夢実らんをゆへ

侍に蠅を追はさる御馬さ
桐の木やテキハキ散つてウント
山の菊曲つる心はわらぬさ
田の人つるも恥かー夏草あ
田の人と心て辨む書はあら

田の人よ御免候く晝寐かや

寐善しやちも甘寝着てかせかサ

寤ふけり憎い社屋も此の命

大名を眺めさるゝに炬燵の家

寐酒いざ年か行かると行まふと

我菊やむきたいた方へつんむいて

大菊よ縄目の辱を思はざや

楽こと寝を笑ひけり名うしむ

人々我は我家の涼しさを

我名とりのばかういも涼しさを

つげよ露秋かたふすまに居らんふ
我柳志なき露はきりり
折さしふるぬ葵の咲はけり
我に似れ能き山もかすみ死
和いや糸瓜は糸瓜の後にまう

かしましや將軍杖の一本やとそ
虫鳴くや耳くも口を持つれそ
露光あり二軒もやひの度鳥
花見くと改ては下にくれ
何あの花見や脇にやぬくと

大方の禄盗人や冬に籠り

起者よ寐者よ丁のちらつとせし

膝の上んよりそいもる若子こゝろ

燕面の朝衣はんと咲はけり

今の世や花見かてらゝの小盗人

ちあゝの暮もやれ老をさく

秋風や何んも昔の美少は

露の世の露々中うそ喧嘩は

死にしがれくつゝ冥へ

死仕度いたせくとさくら

峰をさすかおとろし走りこむ
野佛のお鼻の先の氷柱が
岩まじまじ鋸りや京住に
尻持をついた手で取ら草が
年まであきらしおぬる家業が

えんと云へたあきらむ犬も年を忘
まのわくのつべらばくのさるが
人里へ出なほ清みむ無りけり
泥中の甚と力んじ笑ひけり
作らぬ蘭が先へ枯りけり

埋分をほゆるにけり盗人の粟
下戸衆は左も陰氣をうける陰
目若き夜をいへる命あらず鬼丸
板塚に鼻のつかう涼いふ
我つや夢をやどすやもふき

る清くやおよむ櫛のふらてとも
餅のふらぬかろしとよ年の暮
合點して長きも真いどあふいど
一里坊にこそきくつとつや炭一俵
寝てつらや夢あつらふき二所

我らの心は草も花も

梅咲くやあんな今も昔も餅

打るも夜のにせ玉つくも

あふきは汗の玉かよ稲の露

中着の殻の流る夕涼

江戸住や銭出たあきやら打つ

つ、打たも銭さう江戸住者

人は武士君小柱も唐からし

袴涼一張られたのよ此番を

土一升金一升や門涼も

鳥々々の邪魔に死けり松の餘

恋猫や夢身まそく又眠り

山家より通り抜ける大坐婆

てかゝる世の降つたふやうに梅の家

精出—とよぶが若所今の由

おとろくや花とあつても口まげさ

圓扇の栴ろろよ乳の代りさ

世の中や融^{とけ}顔^{かほ}見^みたん^んは毒^{どく}ぞ

万石の枳をけろくそ納豆汁

こちとらば花か咲かうが咲まひが

凡そ達人は口で南無阿彌陀佛と
昔の海邊のやちも鈴あはれとある
そ、月のとちんぶんかんの浮世と
行儀は月と佛とおふそ巻
放れお鳥巻一すおくと世にけり

やれおふ縄が手をさす足をする
神の座ぶらと人も合になむら
降る雪と梯の氣もらきお栗山子
人里に柱をば曲る野菊は
まよひくはるんとて咲く菊の花

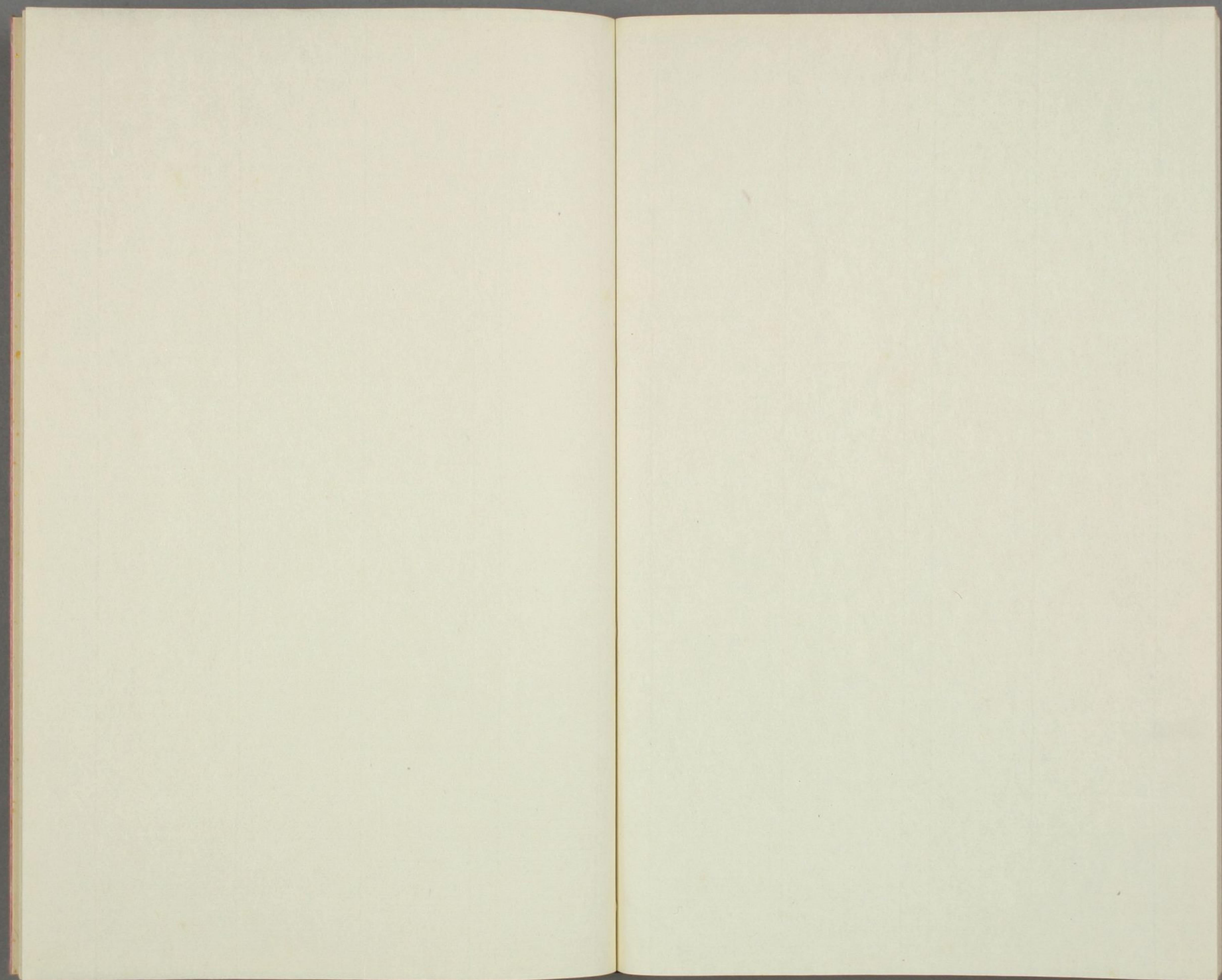
雨まじりちきり志とねばるの隙
一つ蚊のたまりしこくく哉

風の糸引とくまんとねら子哉
流いとこ母がなをけり山の栞
美人らに水志ぼらるる糸瓜哉

江戸住や二階家から初懺
投げ出した足先の先ろく雲の峰
鳴くふ露別々志ハ星にさく
人の身ヲ露を低く雲の峰
瘦せ結るるけく糸一茶こんれあう

老の身やあまの子の前も
とらふとき日本の丁も
おろが世や垣根の香が
の月や江戸の奴ふ何
行秋を尾花がさくばく

梅の香やと合の家
梅の木のちる顔も
梅の木のちる顔も
美しき風上りけり



以下全て

白紙

